途上国から真の「貧しさ」を考える
―本当に必要な支援のかたちとは―

佐々木麻帆
HS30-0131B

目次

はじめに
第1章　貧困とは
　第1節　相対的貧困と絶対的貧困
　第2節　貧困層の定義
　第3節貧困についての見解
第2章　途上国とガーナ
　第1節　途上国とは
　第2節　ガーナについて
第3章　元青年海外協力隊員への聞き取り調査
　第1節　青年海外協力隊とは
　第2節　調査の概要
　第 3 節　教育分野の向上に努めた小学校教諭の事例
　第4節 ICT 教育に携わった JICA 専門家の事例
　第 5 節　現地で協力隊の日本人と出会い結婚したガーナ人男性の事例
　第6節　調査からの比較・分析
第4章　持続可能な社会に向けて
　第1節MDGs と SDGs
　第2節　貧しさとは
おわりに

はじめに

世界では,貧困によって引き起こされる様々な問題が人びとを苦しめている一方で,貧しい国であっても,今ある生活の中で生き生きと暮らす人びとの姿も見受けられる。本稿では,途上国とされる国で暮らす人びとの生活から,経済的な側面だけではない真の「貧しさ」の定義を明らかにし,「貧しさとは何か」について考察する。支援の場では,供給側の都合を優先した支援ではなく,現地のニーズに合わせた支援をしていくことが必要不可欠である。真の「貧しさ」とは何かについて考察し,本当に必要な支援のかたちを明らかにすることで,誰もが生きがいを持つことのできる持続可能な社会のあり方について論じていく。

1　貧困とは

国連開発計画(UNDP) によると,貧困とは「教育・仕事・食料・保健医療・飲料水・住居・エネルギーなど最も基本的な物・サービスを手に入れることができない状態」を指す。この貧困状態を表す代表的な考え方に,相対的貧困と絶対的貧困の 2 つがある。相対的貧困とは,その国や地域の水準で比較したときに,大多数よりも貧しい状態を指す。絶対的貧困とは,国や地域の生活水準とは無関係に,生きていく上で必要最低限の生活水準が満たされていない状態を指す。世界銀行による国際貧困ラインと,国連開発計画による多元的貧困指数などが,これらの貧困を測る指数となっている。貧困についてのノーベル経済学者アマルティア・センは,貧困とは単に所得の低さではなく,教育や生活水準など貧困の持つ多元性に着目する必要があることを指摘する。

2　途上国とガーナ

途上国とは,OECD(経済開発協力機構)の発表する「ODA(政府開発援助)受け取り国リスト」により,経済発展のための援助を受ける開発途上の国々を指す。ODA とは,外務省によると「開発途上地域の開発を主たる目的とする政府及び政府関係機関による国際協力活動」のための公的資金である。このリストは OECD によって 3 年毎に発表されている。次章の聞き取り調査で扱う,アフリカ大陸西部のギニア湾沿いに位置するガーナは,途上国に分類されるものの,一人当たりの国民所得が徐々に上昇し,低所得国から中所得国となっている。つまり現在のガーナは最も貧しい国すなわち後発開発途上国には分類されていない。

3　元青年海外協力隊員への聞き取り調査

第 3 章では,JICA の青年海外協力隊としてボランティア活動を行った経験を持つ日本人女性 2 名と,支援を受ける側であるガーナ出身の男性 1 名の計 3 名に聞き取り調査を行い,途上国の現状や課題について考察した。貧しさについては,3 名とも経済的貧しさよりも「心の貧しさ」が最も残酷であると話していた。協力隊の隊員の一人は,途上国の人たちが自分たちの貧しさを知る残

酷さがあると語っていた。この隊員の語りから,貧困は自分たちの生活と他の生活を比較してはじめて存在し得る概念であることが明らかになった。途上国の最大の課題は,先進国からの支援に頼りすぎている点にある。「援助慣れしている」という隊員の言葉にもあるように,支援慣れしている配属先では,協力隊をはじめ先進国から何か物をもらうことを当たり前のように捉えており,先進国からの全面的な支援を期待するような意識が見られた。聞き取り調査から,ただモノや技術を与えるだけの支援ではなく,上手く相手の力を引き出し,自立できるような支援の仕組みを整える必要があることが示された。

4　持続可能な社会に向けて

近年の国際社会では SDGs が注目されている。その前身である MDGs(Millennium Development Goals) は,2000 年から 2015 年までの国際社会の開発目標であり,開発途上国の開発と支援の目標とされてきた。2015 年から 2030 年までの長期的な開発の指針として採択された SDGs(Sustainable Development Goals) は, 全地球社会の目標とされる点で MDGs と明確に区別される。SDGs が,社会と経済の開発,環境保全を包括的に取り扱うように,開発・環境問題はもはや「人類の安全保障」の問題なのである。

貧困とは,何かしらが欠乏している状態を指し,それは所得水準の低さを含む「物質的な欠乏」と生活の質の低さを含む「精神的な欠乏」の 2 点に分かれる。後者の精神的欠乏つまり「心の貧しさ」は,物質的欠乏の解消によって補われることはない。つまり,真の貧しさとは、経済的な貧困に限定されない「心の貧しさ」を含むもので、「“違い”を尊重できないこと」を表すことが明らかにされた。経済的な貧困や「心の貧しさ」は他との比較があってはじめて生まれる相対的な概念である。この意味では途上国の経済的貧困は先進国の支援が始まった時から生じるものだし、「心の貧困」は先進国に蔓延しているといえよう。先進国でも途上国でも、そこに生きる個人が一人ずつの違いを受け入れ,尊重することで,人々の多様性を相互に認め合う社会になることが望まれる。

おわりに

これまで,一般的に貧しいと定義される途上国に焦点を当て,途上国の課題を分析し,本当に必要な支援のかたちとは何か,真の「貧しさ」とは何かについて考察してきた。対象者 3 人への調査から,貧しさとは「心の貧しさ」を指し,「“違い” を尊重できないこと」が真の「貧しさ」であるとい うことが明らかになった。加えて,昨年の京王線 での無差別殺傷事件を指して、「コミュニティに 溶け込めず、恨みばかりある人は、平和な心や自 由がないため豊かではないと感じる」というガー ナ人男性の言葉も印象に残る。コミュニティから 除外され、恨みや妬みで頭の中が覆いつくされた 人は、金銭的に豊かであっても心の自由や平和が ない貧しい人である。つまり、貧しさや豊かさは、心や考え方というマインドの問題に行き着く。

「真の豊かさ」とは,家族がいるいないにかかわ らず、人のことを想う「豊かな心」を持ち合わせ ていることであり、ささやかな日々の生活を積み 重ねてひとつひとつ丁寧に暮らしていくことこそ が本当の幸せと考えられるのではないだろうか。 貧困の最大の問題は,財政的にも身体的にも脆弱 な家庭がターゲットとされやすいという点にあり, 当事者の意志だけではどうにもならない貧困の無 限ループが繰り広げられる。貧困の連鎖を断ち切 るためにはまず, その国の暮らしを理解した上で, 供給側の都合を優先した支援ではなく,現地のニ ーズに合わせた支援をしていくことが重要である。お金や資源をただ与えるのではなく,現地の特性 や長所を活かし,人々が能動的に生き生きと暮ら していける枠組みを作ることこそが,本当に必要 な支援のかたちをつくるうえで不可欠と考える。

参考文献(一部抜粋)

アマルティア・セン　石塚雅彦(訳)(2000)『自由と経済開発』日本経済新聞社

池田香代子(2017)『世界がもし 100 人の村だったら』マガジンハウス

石井光太(2014)『世界「比較貧困学」入門　日本はほんとうに恵まれているのか』PHP 研究　所

エステル・デュフロ, 峯陽一, コザ・アリーン(訳)(2017)『貧困と闘う知　教育,医療,金融,ガバナンス』みすず書房

岡部恭宜(2018)　『青年海外協力隊は何をもたらしたかー開発協力とグローバル人材育成50 年の成果ー』ミネルヴァ書房

高根務・山田肖子(編) (2011)『ガーナを知るための 47 章』

平野克己(2009)『アフリカ問題 開発と援助の世界史』日本評論社

見田宗介(1996)『現代社会の理論』岩波新書